

# 『日本風土記』における日本語のアクセント表記について

## 『長田夏樹論述集（上）』第16章

（原載：『久重福三郎・坂本一郎先生還暦記念中国研究』，1965年6月）

万暦20年（1592年）頃の侯継高『全浙兵制考』附載『日本風土記』に見える日本語語彙と歌謡の漢字音訳における中国語声調と日本語アクセントの間の選択傾向を検討した論文。まえがきでは日本語の基礎方言が肥筑方言に基づくことを語彙・文法面から示す。第一節では『日本風土記』の全体の構成を紹介する。第二節では明代の海防上編まれた寄語類のみならず宋代の『鶴林玉露』記載の日本語語彙も呉語系の訳音に依る慣行があったとする。第一巻と第二巻の前半で地名だけに使われる口偏の用字があり、また『日本図纂』や『寄語略』を踏襲した訳音があることを指摘する。第三節では中国語の基礎方言を日中交通要地である寧波方言と推定し、当時の寧波音の声母・韻母の推定音価の結論を記す。

第四節が本論文の中心となるもので、当時の寧波音の声調調値として

陰平 低平調      陰上 高折調      陰去 半高折調      陰入 中平促調  
陽平 高転調      陽上 低升調      陽去 低升調      陽入 高升促調

を仮定した上で、日本語二音節名詞の金田一語類の枠組みに沿って以下のような結果を得ている（数字は該当する声調の組み合わせをもつ語彙の数、図表化は紹介者による）：

	高高	イ・エに終 わる高高	高低	イ・エに終 わる高低	低高	イ・エに終 わる低高	低低
第一類	12			5		12	4
第二類	3		5				5
第三類		4				9	15
第四類		6			7		11
第五類					6		4

第五節では歌謡につき当時の寧波推定音と日本語アクセントを対照する。

対訳資料の方言性を両言語の側について推定し、声調とアクセントの訳音における選択傾向を検討し、また訳音の特徴の巻内での偏在や先行資料から継承した成分を抽出するなどの方法論的な面で先駆的である。

ただし、声調の推定調値を導く論証過程がなく、平入声で陽調のほうが高いことや各々のパターンを推定する理由が与えられておらず、また現代寧波語では複雑な変調があるが16世紀末にはなかったのか、という問題がある。一方、現代肥筑方言は二型ないし一型アクセントだが当時はどうだったのかにも興味が寄せられる。（遠藤光暁）